

牛立走テ堂ニ詣テ三匝廻ルニ、二度ニ成ルニ忽ニ苦ブ氣色有テ、臥テハ起ク、如此ク兩三度シテ三匝ヲ廻リ畢テ後ニ、牛屋ニ返リ至テ枕ヲ北ニシテ臥シヌ、四ノ足ヲ指シ延ベテ寢入ルガ如クシテ死ヌ、其ノ時ニ參リ集レル若干ノ上中下ノ道俗男女、音ヲ舉テ泣キ合ヘリ、阿彌陀經ヲ讀ミ念佛ヲ唱ル事无限シ、人皆返ヌレバ、牛ヲバ牛屋ノ上ノ方ニ少シ登テ土葬ニシツ、其ノ上ニ卒都婆ヲ起テ釤拔ヲ差セリ、夏ノ事ナレバ土葬也ト云ヘドモ、少モ香可有キニ露其屍キ香无シ、其後七日毎ニ佛經ヲ供養ス、七々日、若ハ明ル年ノ其ノ日ニ至ルマテ、諸ノ人皆取々ニ佛事ヲ行ス、下○略

〔日本紀略後十一條〕萬壽二年五月十七日戊戌、入道大相國○道長藤原向關寺給彼牛稱迦葉佛所化云々、廿三日甲辰右大臣○實資源向關寺給、

○按ズルニ、本書印本頭書ニ牛佛說、又見略記○扶桑及百練抄、榮花物語峯之月卷、今昔物語、古事談等、廣道曰、是與據駿牛畫詞僞作清涼寺牛皮華鬘緣起相類也、浮屠氏歎愚俗固不足論也、大臣而信街談巷說、可勝歎哉、トアリ、

〔榮花物語峯の月〕この比○萬壽二きけばあふさかのあなたに、せきでらといふ所にうし佛あらはれ給て、よろづの人まいりみたてまつる、年比この寺におほきなる御だうたて、彌勒をつぐりすゑたてまつりける、くれえもいはぬ大木どもをたゞ此うし一してはこびあぐることをしけり、あはれなるうしとのみ、御寺のひじりおもひいたがける程にてらのあたりにすむ人かりて、あすつかはんとておきたりける夜の夢に、我はかせう佛なり、此寺の佛をつくり堂をたてさせんとて、年ごろするにこそあれ、たゞ人はいかでかつかふべきと見たりければ、おきてかうかう夢をみつるといひて、おがみさはぐ也けり、牛もさやにて黒くてさ、やかにおがしげにぞありける、つながねどゆきさる事もなく、例の牛の心ざまにもにざりけり、入道どの○道長藤原をはむ